

中国におけるアフリカ研究

張宏明*

アフリカ研究は中国では「アフリカ学」とも呼ばれ、多くの学問分野にわたる総合的な地域研究である。中国のアフリカ研究というテーマが含む内容はかなり多くまた複雑であるが、本論文では主に次の問題について述べる。(1) アフリカ研究発展の概況、(2) アフリカ研究に携わる主な機関、(3) アフリカ研究の主要な研究成果、(4) アフリカ研究の主要な学術刊行物、(5) 中国のアフリカ学の研究が直面している問題、(6) 西アジア・アフリカ研究所が現在研究している課題。

第1節 アフリカ研究発展の概況

中国（ここでは中国大陸のみを指し、台湾、香港、マカオ地区は含まない）のアフリカ研究は1950年代末から60年代初めにアフリカの民族独立運動の進展にともなってスタートした。中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所¹、中国アジア・アフリカ学会（主としてアジア・ア

*中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所、副所長。

¹ 1955年アジア・アフリカ（バンドン）会議後、中国がアジア・アフリカ諸国との関係を強化し、アジア・アフリカの民族独立運動を支持するために、アジア・アフリカの基本状況を知ることが急務となった。1959年9月、中国共産党中央宣伝部は「中国科学院哲学社会科学部」（中国社会科学院の前身）にアジア・アフリカ研究所の設立計画を委託した。1961年、毛沢東主席があるアフリカからの賓客との会談で、「私たちはアフリカの状況については、よくわからない。アフリカ研究所をつくって、アフリカの歴史、地理、社会経済状況を研究する必要がある。」と述べた。毛沢東主席の指示により、研究所設立が急がれた。1961年7月4日にアジア・アフリカ研究所が創設され、中国科学院哲学社会科学部の所属となった。アジア・アフリカ研究所創立の初期、研究地域別に3つの研究グループが設けられ、第一グループは、サハラ以南のアフリカ（当時の51の国と地域を含む）の研究を、第二グループは、西アジアと北アフリカ（当時の25の国と地域を含む）の研究を、第3グループは、東南アジア、南アジアと北東アジア（当時の22の国と地域を含む）の研究を担当した。1963年12月30日、中央は中央外務グループの「外国研究の強化に関する報告」に回答し、伝達したが、この報告はアジア・アフリカ研究所を基礎に、西アジア・アフリカ研究所と東南アジア研究所を設立することを提案するものであった。1964年1月20日、この報告と毛沢東主席の指示に基づき、国家編制委員会はアジア・アフリカ研究所が西アジア・アフリカ研究所と東南アジア研究所とを設置することに同意した。1964年10月30日、正式に西アジア・アフリカ研究所と名称が変更され、中国共産党中央対外連絡部と中国科学院哲学社会科学部の二重の指導を受けることとなり、呉学謙(元中国共産党中央対外連絡部部长・外交部長)が研究所の副所長を兼任した。1981年1月1日、西アジア・アフリカ研究所は中国共産党中央対外連絡部から中国社会科学院の帰属となった。

リカ諸国の著名人との友好交流活動を行う)、北京大学アジア・アフリカ研究所(主としてアフリカの歴史研究を行う)、南京大学アフリカ研究室(主にアフリカの経済、地理の研究を行う)は中国で最も早く設立されたアフリカ研究機関と民間学術団体である。ここで、筆者は、中国のアフリカ研究が、いちはやくアフリカ研究に着手した欧米諸国とはいささか異なるところがある点を強調したい。欧米諸国のアフリカ研究は人類学、考古学、歴史学、地理学、言語学から入ったもので、初期の研究成果の多くは、ヨーロッパの人類学者、民族学者、社会学者、言語学者、考古学者、歴史学者および植民地の役人や宣教師の著述のなかに見られる。一方中国のアフリカ研究は政治経済学から入ったもので、国際環境、アフリカ情勢、中国の情勢および外交戦略、中国・アフリカ関係(以下、中ア関係と略す)の発展・変化と常にかかわっている。中国のアフリカ研究は半世紀近い発展の過程でおよそ四つの段階を経ており、そこに中国のアフリカ研究発展の軌跡のみならず、はっきりした時代的特徴を観察できる。

1. アフリカ研究の初期段階

1960年代から70年代は中国のアフリカ研究の初期段階である。この時期中国がアフリカ諸国との関係を発展させたのは、経済面の考慮からではなく、政治・外交上の必要に基づいていた。この時期の中国におけるアフリカ研究がアフリカの政治情勢の動向研究を主とし、中でもアフリカ地域の民族解放運動を中心課題としていたのはこのためである。研究内容には主に以下の分野が含まれる。(1) アフリカ地域の民族解放運動の進展(重大事件、発展の法則、およびその趨勢と特徴などが含まれる)、(2) アフリカの独立国家の基本状況(政治、経済、社会、民族、地理、歴史などを含む)と非独立地域の対立と闘争、(3) アフリカ大陸の基本的な経済状況および社会階層構造の変化、(4) アフリカ地域の民族主義の潮流と政党、(5) 旧ソ連と西側諸国の対アフリカ政策などである。

厳密な意味では、この時期の中国のアフリカ研究はまだ学術研究と呼べるものではなく、多くが動向調査であった。この点については当時の研究雑誌や叢書の名称からも実証することができる²。これは、当時アフリカ研究に携わっていた機関の多くが党と政府機関に属し(私が所属する中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所も、当時は中国共産党中央対外連絡部が所管していた)、研究活動は主に上級主管部門から任された仕事を完遂することであったためである。

² この時期の主要な刊行物は『アジア・アフリカ訳文叢書(亜非訳叢)』、『アジア・アフリカ資料(亜非資料)』、『アフリカ動態(非洲動態)』、『西アジア・アフリカ資料(西亜非州資料)』などの内部刊行物である。叢書には主に『アフリカ手帳(非洲手冊)』、『アフリカ列国誌(非洲列国志)』などがある。この時期における学術的研究成果と言えるものには、西アジア・アフリカ研究所の初代所長である張鉄生の著作『中央アフリカ交通史の初歩的研究(中非交通史初探)(論文集)』、納忠編『エジプト近代略史(埃及近代簡史)』がある。(訳注一本稿では、中国語書籍名に関して、日本語訳ー中国語の順に記す)

また、当時アフリカ研究に携わっていた学者の多くは外国語学科の出身で、専門の学術的バックグラウンドがなかった³。この時期における中国のアフリカ研究は基礎研究と国別研究に偏り、研究室の設置に際しては「分兵把口（分散）」方式⁴がとられており、主な仕事は、アフリカ大陸および主要国の基本的な状況を収集、整理、分析し、明らかにすることであった⁵。当時の研究者には上級主管部門から任された任務を遂行するほか、主に二つの任務があり、ひとつは『アフリカ便覧（非洲手冊）（概況部分）』を執筆すること、もうひとつは『アフリカ列国誌（非洲列国誌）』を編纂することであった。この時期の研究成果は大きく二つに分類することができる。一つは当時の政治情勢と密接にかかわる時事的調査研究である。もう一つは知識普及型の通俗的読み物である。「文化大革命」（1966－1976）期間には、中国のアフリカ研究が大きな干渉を受け、研究活動は基本的に中断状態に陥ったことを指摘しておかなければならない⁶。

2. アフリカ研究の回復・発展段階

1980年代は中国のアフリカ研究の回復・発展の段階である。改革開放の新たな情勢、中国の外交戦略と対アフリカ政策の調整の必要に適応するため、中国のアフリカ研究はかつてのいわゆる「分兵把口」式の研究モデルを改め、重点国家の、特に重大問題についての基礎理論研究と総合研究を強化し、研究分野も次第に拡大した。引き続きアフリカの国や地域の重大な政治

³ 当時西アジア・アフリカ研究所の研究者は、中国科学院哲学社会科学部の経済研究所、歴史研究所、外交部の国際関係研究所などの部門から数人の研究者が移ってきたほかは、主に北京大学、中国人民大学、復旦大学、山東大学、南京大学、雲南大学、北京外国語学院の中文学科、史学部、政治経済学部、哲学科、英語学科、フランス語学科、ロシア語学科、アラビア語学科などから配属された20数名の大学本科卒業生であった。

⁴ 西アジア・アフリカ研究所を例にとると、研究所設置の初期、研究室の設置に際してとったのは「分兵把口（分散）」方式である。1978年に研究所には8つの研究室があり、そのうちアフリカ研究にかかわっていたのは、総合室、東アフリカ室、西アフリカ室、南アフリカ室、北アフリカ室と中央アフリカ室であった。1981年に西アジア・アフリカ研究所が中国共産党中央対外連絡部から中国社会科学院の所属となった後、ようやく学科編成に基づいて研究室が設立された。

⁵ これらの国はギニア、アンゴラ、ガーナ、マリ、エチオピア、タンザニア、ザンビア、アルジェリア、ケニア、南アフリカ、ナミビア、コンゴ民主共和国、エチオピア、コートジボアール、ウガンダ、モロッコ、モーリタニア、モザンビーク、ナイジェリア、カメルーンなどである。

⁶ 「文化大革命」（1966-1976）期間中、学術専門書は一冊も発表されなかった。計画では1966年末に完成することになっていた16冊のアフリカ列国誌は水泡に帰し、原稿はすべて散逸し、研究者は農村に下放された。幸いだったのは、対アフリカ工作の必要から、西アジア・アフリカ研究所の中堅が1971年から1973年の間に続々と中国共産党中央対外連絡部に呼び戻され、『非洲動態（アフリカ動態）』の編纂に加わったことである。1977年11月30日に、中央対外連絡部は西アジア・アフリカ研究所の再開を許可し、一年半の準備を経て、1978年4月、西アジア・アフリカ研究所は全面的に仕事を再開した。

的、突発的事件について追跡しつつ、「アフリカ社会主義」の理論と実践、アフリカの軍事政権の盛衰、アフリカ諸国の指導者の思想と政策の傾向、アフリカの経済情勢、アフリカの社会構造と民族関係、南アフリカのアパルトヘイト、米ソの世界争奪がアフリカ地域に与えた影響、台湾要因が中ア関係に与える影響などの問題についての研究を強化した。このほか、この時期中国の学者のアフリカの歴史問題、とくに大西洋奴隷貿易、植民地化と「非植民地化」などの問題についての研究も大きな進展を見せた。

この時期アフリカ研究に携わった機関と人員の構成や数には大きな変化はなかった。しかし、西アジア・アフリカ研所が1981年に中国社会科学院の所属となってから、方針や任務が転換し、関連学術雑誌が創刊、復刊されたことにより、この時期、アフリカ研究は、深さや幅の面でも、研究成果の数や質の面でもある程度レベルアップした。これはとりわけ、アフリカの政治や歴史の研究で目立った。しかし、全体的にいて、この時期の中国のアフリカ研究はまだ回復型の発展段階にあり、情勢研究と国別研究が依然としてこの時期の重点であり、研究活動は「門を閉ざして車を作るといった状況（主観に偏ったもの）」であった。生涯アフリカ研究に携わっていた学者でさえ一度もアフリカに行って現地を視察したことがなく、国外のアフリカ学会との学術交流も少なかった。

3. アフリカ研究の発展段階

1990年代は中国のアフリカ研究が学問分野として次第に確立され、調整、整備された時期である⁷。冷戦後の国際情勢、中国とアフリカの国内情勢の変化およびそれによって生まれた新たな状況や新たな問題にかんがみ、中国の学者は研究の重点を現代のアフリカの政治、経済発展、国際関係問題および中ア関係の総合的、政策的研究に移しはじめ、同時にアフリカの歴史、社会、文化、法律などについての基礎研究も行うようになった。主な研究分野とテーマは、アフリカ諸国の政治体制改革（政治の民主化）、アフリカ地域の衝突と安全保障メカニズム、アフリカの経済構造の調整（経済自由化）、アフリカ地域の経済一体化、アフリカ各国の農業の概況、南アフリカの政治経済の発展、アフリカの伝統文化と近代化の間関係、冷戦後のアフリカの国際政治の中での地位と役割、グローバル化と国際経済環境がアフリカの発展に与える影響、大国の対アフリカ政策と中ア関係の発展、中国外交戦略におけるアフリカの地位と役割、台湾要因の中ア関係への影響などである。

この時期は中国のアフリカ研究の発展が比較的進んだ時期である。この間に、基礎研究と理

⁷ 私が所属する西アジア・アフリカ研究所を例にとると、中国社会科学院の所属となった後、前後5回の大きな学科調整を経て、「ある程度の強化、維持、合併、取捨を行い、重点分野を絞るとともに、各学科をともに発展させる」という基本方針に基づき、最終的に「アフリカ政治」、「アフリカ経済」、「アフリカの社会文化」、「アフリカの国際関係」という4つの重点学科を確立した。

論研究が強化され、研究分野が次第に拡大し、とくにアフリカの経済問題についての研究が強化され、一部の学者がアフリカに深く入り込んで現地視察を行うようになり、国外の研究機関との恒常的な学術交流が確立された。また研究成果、とくにいくつかの学術専門書を相次いで世に問うことができた。とりわけ重要なことは中国のアフリカ研究の学問分野としての体系が次第に整ってきたことである。

4. アフリカ研究の現状

21世紀に入って以降は、中国のアフリカ研究がもっとも盛んになった時期である。この時期、学問分野としての構築が進み、研究分野が大きく拡大し、各種の学術活動がますます増え、国外のアフリカ学会との学術交流が日増しに頻繁になり、研究成果が相次いで登場している。また、アフリカ研究に携わる機関が多様化し、もっぱらアフリカ研究に従事する学術機関としての中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所のほか、中国国際問題研究所、中国現代国際関係研究院など国際問題の研究を行っている他の機関、いくつかの地方の省や市の国際問題研究機関までもがアフリカ問題に対する研究を強化し、多くの高等教育機関が相次いでアフリカ研究センターを設立していることは特筆すべきである。

ここ数年、中国のアフリカ研究の最前線と重大問題は以下の分野に集中している。

ーアフリカの政治面で注目される重点的問題は、アフリカ諸国の政治改革と民主主義体制の特色、政治民主化がアフリカ諸国の内政や外交に与える影響、アフリカ連合のメカニズムとその安全保障維持の役割、民族と宗教の要因がアフリカの社会政治経済に与える影響、アフリカの法体系と法制度づくりなどである。

ーアフリカ経済に関して注目される重点的問題は、経済改革の行方と経済発展の主要な特徴、地域組織の経済発展における役割、貧困問題と持続可能な発展、資源開発と社会経済の発展、投資環境とリスク、金融および資本市場、外部からの援助とアフリカの自主的な発展などである。

ーアフリカの社会文化面に関して注目される重点的問題は、教育と人的資源開発、感染症の予防、非政府組織の役割、アフリカ社会の転換過程での文化変容の問題、文化的覇権と文化的自主意識、「アフリカ中心主義」の理論と復興などである。

ーアフリカの国際関係で注目される重点的問題は、政治民主化が中ア関係に与える影響、中ア経済貿易協力の互恵的な比較優位、中ア経済協力が直面する問題と対策、大国の対アフリカ政策の動向との中ア関係への影響、アフリカとグローバルな問題（人口、難民、疾病、環境、エネルギー、安全、発展）などである。

5. アフリカ研究の傾向と特徴

近年、中国のアフリカ研究には以下のような傾向と特徴が現れている。

その一、中国政府によるアフリカへの関与の強化、および中ア関係の全面的な発展にともなう、中国のアフリカ研究の対象は拡大を続け、次第に主要な学問分野と領域をカバーするようになった。

その二、中国の外交戦略と近代化のニーズに基づき、中国のアフリカ研究は基礎研究と応用研究あるいは政策研究との関係をいっそう重視するようになった。つまり、基礎研究に依拠しながら、アフリカの重大な現実的問題に対する戦略的、展望的な応用研究と政策研究を展開している。

その三、アフリカに対する理解が深まるにつれ、中国の学者はいくつかの問題に対して、学際的な研究をいっそう強化している。実際、1990年代半ば以降、アフリカ政治の発展、アフリカの持続的発展、アフリカ地域の一体化などの問題についての中国の学者による研究はこうした傾向を示している。

その四、中国による「対外進出」戦略の実施に伴い、ますます多くの中国企業がアフリカとの経済貿易業務を展開しており、これらの企業は提携対象国の状況を全面的に理解する必要がある。こうした状況のもとで、国別の研究あるいは「ケーススタディー」、とくにアフリカの主要な国や分野(業種)についてのアップデートな研究が日増しに重視されるようになってきている。

その五、中国における対アフリカ提携主体の多元化と対アフリカ需要の増大に伴い、中国の学者は学術研究以外に、政府や社会に貢献する責任をより多く負うようになった。これは中国のアフリカ研究がいっそう細分化し、深化しつつあることを意味する。同時に学者が引き受ける各種の委託テーマや協力テーマ(政府、銀行、企業、国外などからの)がますます多くなっていることを意味する。

その六、中国とアフリカの協力分野の絶えざる拡大、中国のアフリカ研究機関の多様化、とくに一部高等教育機関でアフリカ関連の「特定テーマ」の研究機関が相次いで設立されたことに伴い、国内の各研究機関がアフリカ研究についての各自の得意分野を次第に形成しつつある。

その七、中ア関係がますます国際社会の注目を集め、中国の学者がアフリカに現地調査に赴く機会が増え、国外のアフリカ学会との交流が深まったことに伴い、中国のアフリカ研究は次第に世界とリンクしはじめている。結果として、中国と国外とくに西側諸国のアフリカ研究所が注目する最先端の問題が似通ってきている。

第2節 アフリカ問題の研究に携わる機関

1960年代にアフリカ問題の研究に携わる中国で最初の研究機関が誕生してから現在までに、

アフリカ研究に携わる中国の機関は多様化の傾向を示している。とくにここ十年来、中ア関係の発展に伴い、多くの高等教育機関にアフリカ問題を扱う研究センターが相次いで設立された。現在、中国でアフリカ問題の研究に携わる機関はおよそ政府機関、学術機関、民間団体の三つに大別することができる。

1. 政府機関

中国でアフリカ問題の研究に携わる政府機関は、それぞれ、党、政府、軍の系統に属する。外交部アフリカ局（司）、商務部西アジア・アフリカ局、中国共産党中央対外連絡部、文化部対外連絡局、国防部外事局および教育部、衛生部、農業部、科学技術部の国際合作局などがそれぞれにあたる。上述の政府機関には一般にはアフリカ問題の調査研究に携わる研究室が設置されている。これらの研究室は、外交部アフリカ局の「総合処」（調査研究室）が主にアフリカの政治情勢や中国とアフリカの政治、外交の動態的、政策的研究を行い、商務部の西アジア・アフリカ局が主にアフリカの経済情勢や中国とアフリカの経済貿易関係の調査研究を行い、中国共産党中央対外連絡部が主にアフリカの政党政治および中国とアフリカの政党間関係の研究を行うなど、主に当該部門と関連するアフリカの動態的、政策的研究を行っている。

2. 学術機関

中国でアフリカ問題の研究に携わる学術機関は二つに分けることができる。一つは国際問題の研究に携わる専門の学術機関で、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所（1961年設立）、中国国際問題研究所（1956年設立）、中国現代国際関係研究院（2003年に改名、前身は1980年に設立された中国現代国際関係研究所）、商務部国際貿易経済合作研究院（前身は対外経済貿易部国際貿易研究所と国際経済合作研究所、2002年に合併設立）、國務院發展研究センターアジア・アフリカ發展研究所（1994年設立）などがそれにあたり、さらに、上海国際問題研究所（1960年設立）など、地方の省や市の国際問題研究機関がある。上述の学術機関のうち、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所だけがもっぱらアフリカ学の研究に従事する専門学術機関（研究所にはアフリカ政治経済、社会文化、国際関係の三つの研究室が設置されている）で、その他の研究機関の対アフリカ研究は基本的にアジア・アフリカ研究室のなかに含まれている。

もうひとつは、高等教育機関が設立した研究センターで、北京大学アフリカ研究センター（1998年設立、前身は1964年設立の北京大学アジア・アフリカ研究所）、南京大学アフリカ研究所（1990年設立、前身は1964年設立の南京大学アフリカ経済地理研究室）、湘潭大学アフリカ法律・社会研究センター（2005年設立、前身は1998年に設立された湘潭大学アフリカ法研究所）、浙江師範大学アフリカ研究院（2007年設立、前身は2003年設立の浙江師範大学アフリカ教育研究センター）、上海師範大学アフリカ研究センター（1998年設立）などである。

このほか、中央党校、人民大学、中央民族学院、外交学院、国際関係学院、雲南大学、南開大学、山西大学などでも一部の教師がアフリカ問題の教育と研究活動に従事している。上述の研究機関のアフリカ研究には、それぞれ重点分野があり、北京大学アフリカ研究センターはアフリカの歴史研究に、湘潭大学アフリカ法律・社会研究センターはアフリカの法律研究に、浙江師範大学アフリカ教育研究院はアフリカの教育の研究に、南京大学アフリカ研究所はアフリカの地理と農業の研究に重点を置いている。

3. 民間団体

中国にはアフリカと関連のある民間団体が十数団体あるが、アフリカ問題の研究を行っている民間社会団体は、中国アジア・アフリカ学会（1962年設立）、中国アフリカ問題研究学会（1979年設立）と中国アフリカ史研究会（1980年設立）の三団体である。中国アジア・アフリカ学会と中国アフリカ史研究会は、それぞれ中国社会科学院の西アジア・アフリカ研究所と世界歴史研究所の系列に属し、中国社会科学院が主管している。中国アフリカ問題研究学会は1979年に設立されてから1995年まで中国社会科学院の系列に属していたが、その後南京大学の系列に入り、教育部が主管している。

－中国アジア・アフリカ学会のメンバーは、主に退職した政府関係者と学会の著名人からなる。初代会長には文化部部長周揚氏が就任し、現在の会長は前中国共産党対外連絡部副部長の李成仁氏、会員は最も多いときで500人余りであった。

－中国アフリカ問題研究会は会員400人余りで、対アフリカ業務やアフリカ問題の研究に携わる研究、教育、外事、経済貿易、報道、文化、出版関係者、アフリカと取引のある企業の関係者からなる。初代会長には南京大学の張同鑄教授が就任し、現在の会長は安永玉大使である。

－中国アフリカ史研究会は会員150名余り、全国のアフリカ史の教育、研究関係者と実務担当者からなる。初代会長には北京語言学院納忠教授が就任し、現在の会長は北京大学丁騷教授である。実際、上述の三つの学会で、アフリカ研究と教育に携わる人は相互に重複している。

学会は民間の緩やかな組織で、中国社会科学院が主管する中国アジア・アフリカ学会と中国アフリカ史研究会には、毎年わずかな活動予算があるだけである。一方、教育部が主管する中国アフリカ問題研究会は基本的に予算の資金源がない。学会活動は主に自己調達資金（企業の賛助金など）に頼っている。予算がないため、学会の活動は少なく、一般に年一回特定テーマのシンポジウムを開く程度である。

第3節 アフリカ研究の主要な研究成果

半世紀近い学術的な蓄積を経て、中国の学者はアフリカ学研究の多くの分野で成果を上げ、

いくつかの質の高い学術専門書、研究報告書や学術論文を出版、発表している。紙幅に限りがあるため、下記にあげるのは中国の研究者が各時期に出版した比較的評判の高い専門書のみである⁸。

1. 政治研究分野の代表作

政治は中国のアフリカ研究の重点であり、研究は 1960 年代に始まったが、アフリカ政治を一つの独立した学問分野として系統的に研究するようになったのは 1980 年代以降である。20 年余りの間に、中国の研究者はアフリカの政治問題について多くの学術論文を発表したが、学術的専門書は少なく、このなかで比較的評価の高い専門書はおおむね以下のいくつかの種類に分けることができる。

(1) 政治発展問題についての研究

これらの著書はアフリカ地域あるいは各国の国家構造、政治体制、政党制度の研究を主とし、この分野の代表的作品には、林修坡ほか編『外国の政治制度と監察制度の概要（外国政治制度与監察制度概要）』（北京大学、1991 年）、徐濟明、談世中編『現代アフリカの政治改革（当代非洲政治変革）』（経済科学出版社、1998 年）、張宏明『多次元からみたアフリカの政治発展（多維視野中的非洲政治発展）』（社会科学文献出版社、1999 年）、賀文萍『アフリカ諸国の民主化プロセスの研究（非洲国家民主化進程研究）』（時事出版社、2005 年）、陸庭恩・劉静『アフリカの民族主義政党と政党政治（非洲民族主義政党与政党制度）』（華東師範大学出版社、1997 年）などがある。

(2) 政治思潮と政治指導者についての研究

これらの著作は主にアフリカで近代以降流行した 3 つの政治思潮、すなわちパンアフリカニズム、社会主義と民族主義の研究に関連している。唐大盾編『パンアフリカニズムとアフリカ統一組織文選：1900-1999 年（汎非主義与非洲統一組織文選：1900-1999 年）』（華東師範大学出版社、1995 年）、唐大盾・張士智ほか『アフリカ社会主義：歴史、理論、実践（非洲社会主義：歴史、理論、実践）』（世界知識出版社、1988 年）、陳公元・唐大盾編『アフリカ社会主義探求（非洲社会主義探索）』（中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所、1989 年）、唐大盾・

⁸ 読者が 1949 年以來の中国のアフリカ問題研究に関する文献に興味があれば、馬惠平編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1949-1981 年（非洲問題研究中文文献目録：1949-1981 年）』、張毓熙編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1982-1989 年（非洲問題研究中文文献目録：1982-1989 年）』、張毓熙編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1990-1996 年（非洲問題研究中文文献目録：1990-1996 年）』、成紅・趙萃編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1997-2005 年（非洲問題研究中文文献目録：1997-2005 年）』を参照。

徐済明・陳公元編『アフリカ社会主義新論（非洲社会主義新論）』（教育科学出版社、1994年）、李安山『アフリカ民族主義研究（非洲民族主義研究）』（中国国際広播出版社、2004年）、陳公元・唐大盾・原牧編『アフリカ英雄伝（非洲風雲人物）』（世界知識出版社、1989年）、李広一編『アフリカ名士伝（非洲名人伝）』（湖南出版社、1991年）、陸庭恩・黄捨驕・陸苗耕編『歴史に影響を与えたアフリカのリーダー（影響歴史進程非洲領袖）』（世界知識出版社 2005年）、楊立華の『マンデラー南アフリカ民族団結の父（曼德拉－南非民族団結之父）』（長春出版社、1995年）、温憲著の『私はアフリカ人である：ムベキ伝（我是非洲人：姆貝基伝）』（世界知識出版社、2000年）などである。

(3) 法律と法制度づくりについての研究

中国のこの分野の研究は 1990 年代の中頃にスタートし、主要な著作には、洪永紅・夏新華ほか『アフリカ法序論（非洲法導論）』（湖南人民出版社、2000年）、洪永紅『アフリカ刑法論（非洲刑法評論）』（中国檢察出版社、2005年）などがある。

2. 経済研究分野の代表作

1980年代から、中国が改革開放後経済へと重点を移したこと、およびアフリカ諸国の経済構造調整の推進にともない、アフリカ経済の研究は日増しに中国の学者から重視されるようになった。研究内容はアフリカ経済の各分野に及び、多くの学術論文が発表されるようになったが、このなかで比較的評価の高い専門書はおおむね以下の数種類に分けることができる。

(1) 経済の基本的な情況についての説明的研究

これらの著作は、一般的にアフリカ地域あるいは各国の基本的な経済情況、あるいはアフリカ経済のあるひとつの部門、分野の情況について詳しい紹介と叙述を行うものである。この分野の代表作には、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所のグループ編集による『アフリカ経済（非洲経済）（上、下）』（人民出版社、1987年）、談世中『前進するアフリカ農業（前進中的非洲農業）』（農業出版社、1982年）、曾尊固ほか編『アフリカ農業地理（非洲農業地理）』（商務印書館、1984年）、張同鏄ほか編『アフリカ石油地理（非洲石油地理）』（科学出版社、1991年）、劉鵬等編『アフリカ熱帯木材（非洲熱帯木材）』（中国林業出版社、1996年）、2000年に中国財政経済出版社が出版した4巻本『アフリカ農業開発投資の手引き（非洲農業開発投資指南）』叢書、陸庭恩編『アフリカ農業発展略史（非洲農業発展簡史）』、陳宗徳・姚桂梅編『アフリカ各国農業概況（非洲各国農業概況）（上、下）』、何秀栄・王秀清・李平編『アフリカ農産物市場と貿易（非洲農産物市場和貿易）』、文雲朝編『アフリカ農業資源開発利用（非洲農業資源開発利用）』などである。

(2) 経済問題についての総合的な研究

この種の著作は、アフリカ地域や各国の経済発展に存在する重大かつ現実的な問題や理論問題の研究を中心としており、アフリカの経済発展についての中国の学者の見解を的確に述べている。

この分野の代表作には、陳宗徳・呉兆契編『サハラ以南アフリカにおける経済発展戦略の研究（撒哈拉以南非洲經濟發展戰略研究）』（北京大学出版社、1987年）、張同鑄編『アフリカの経済社会発展戦略問題の研究（非洲經濟社会發展戰略問題研究）』（人民出版社、1992年）、現代国際関係研究所アフリカ経済編纂グループ『アフリカ諸国の経済の発展と改革（非洲国家經濟發展与改革）』（時事出版社、1992年）、羅建国『アフリカ民族資本の発展：1960-1990（非洲民族資本的發展：1960-1990）』（華東師範大学出版社、1997年）、談世中編『反省と発展：アフリカの経済調整と持続可能性（反思与發展：非洲經濟調整与可持續性）』（社会科学文献出版社、1998年）、李継東『近代化の遅れ—独立後の「アフリカ病」についての初歩的分析（現代化的延誤—対独立後「非洲病」的初歩分析）』（中国經濟出版社、1997年）、舒運国『アフリカの人口増加と経済発展の研究（非洲人口增長与經濟發展研究）』（華東師範大学出版社、1996年）、同『改革の失敗：20世紀末サハラ以南のアフリカ諸国の構造調整評価（失敗的改革：20世紀末撒哈拉以南非洲国家結構調整評估）』（2004年）などである。

(3) アフリカ市場についての調査研究

1990年代から、中国の政府や企業がアフリカ市場の開拓に力を入れるようになると、アフリカに関する投資案内、ビジネスの手引きなどの書籍が気運に乗じて登場した。たとえば陳光耀・楊一平編『アフリカ諸国貿易案内（非洲国家貿易指南）』（中国經濟出版社、1993年）、中国対外貿易經濟部西アジア・アフリカ司編『世界各国貿易・投資案内—北部アフリカ分冊、中部・西部アフリカ分冊、東部・南部アフリカ分冊（世界各国貿易和投資指南—北非分冊、中西非分冊、東南非分冊）』（經濟管理出版社、1994年）、中国社会科学院グループ編『世界各国ビジネスの手引き—中部・東部アフリカ編（世界各国商務指南—中東非洲卷）』（中国社会科学出版社、1996年）、対外貿易經濟貿易部・国際貿易研究所編『アフリカ市場開拓の新たなチャンス（開拓非洲市場的新機遇）』（中国対外經濟貿易出版社、1997年）、黄沢全編『アフリカ投資（投資非洲）』（京華出版社、1998年）、宋国明編『アフリカ鉱業投資案内（非洲鉱業投資指南）』（地質出版社、2004年）などがある。

3. 文化教育研究分野の代表作

1980年代から、中国の学者はアフリカの文化、教育、美術、文学、舞踊、音楽などの分野に対しても踏み込んだ紹介を行っている。この分野の著述には、学術専門書と紹介的な普及読み物がある。たとえば、丁騷『アフリカ黒人文化（非洲黒人文化）』（浙江人民出版社、1993年）、劉鴻武『ブラックアフリカの文化の研究（黒非洲文化研究）』（華東師範大学出版社、1997年）、李保平『アフリカの伝統文化と近代化（非洲伝統文化与現代化）』（北京大学出版社、1997年）、艾周昌編『アフリカ黒人文明（非洲黒人文明）』（中国社会科学出版社、1999年）、李建忠『戦後アフリカ教育の研究（戦後非洲教育研究）』（江西人民教育出版社、1996年）、アフリカ教育概況編纂グループ編『アフリカの教育の概況（非洲教育概況）』（中国旅遊出版社、1999年）、徐金華編『世界の有名大学—アフリカ、オセアニア編（世界著名学府—非洲、大洋州巻）』（中国人民公安大学出版社、1998年）、張榮生編『アフリカの黒人芸術（非洲黒人芸術）』（人民美術出版社、1988年）、李森編『ブラックアフリカの彫刻（黒非洲彫刻）』（労働者出版社、1988年）、梁宇編『20世紀アフリカ美術（20世紀非洲美術）』（文化芸術出版社、1997）、張榮生編『アフリカの黒人彫刻芸術（非洲黒人彫刻芸術）』（河北教育出版社、2003年）などである。

4. 歴史研究分野の代表作

1980年代から、中国の学者はアフリカの歴史を独立した学問分野として研究し、奴隷貿易、植民地主義、アフリカの民族独立運動などの問題に重きをおき、突っ込んだ研究を行うようになった。この分野で比較的評価の高い著作には、中国アフリカ歴史研究会編『アフリカ史論文集（非洲史論文集）』（三聯書店、1982年）、楊人鞭『アフリカ通史簡略編—太古から1918年（非洲通史簡編—從遠古至1918年）』（人民出版社、1984年）、華東師範大学出版社からの3巻本『アフリカ通史（非洲通史）』（1995年）—すなわち何川芳・寧騷編『アフリカ通史・古代編（非洲通史・古代巻）』、艾周昌・鄭家馨編『アフリカ通史・近代編（非洲通史・近代巻）』、陸庭恩・彭坤元編『アフリカ通史・現代編（非洲通史・現代巻）』、さらに鄭家馨編『植民地主義の歴史・アフリカ編（殖民主義史・非洲巻）』（北京大学出版社、1999年）、陸庭恩『帝国主義とアフリカ：1914—1939年（帝国主義与非洲：1914—1939年）』（北京大学出版社、1987）、吳秉真・高晋元編『アフリカ民族独立略史（非洲民族独立簡史）』（世界知識出版社、1993年）、陸庭恩・寧騷・趙淑慧編『アフリカの過去と現在（非洲的過去与現在）』（北京師範学院出版社、1989年）、李安山『植民地支配と農村社会の反抗（植民主義統治与農村社会反抗）』（湖南教育出版社、1999年）、顧章義『台頭するアフリカ（崛起的非洲）』（中国青年出版社、1999）などがある。このほか、中国対外翻訳出版社は全国の力を結集し、20年近くをかけて、ユネスコが編纂した8巻本の『アフリカ通史（非洲通史）』を翻訳、出版した。

5. 中ア関係研究分野の代表作

中ア関係は常に中国のアフリカ研究が関心を寄せる重点研究分野であり、関連研究報告、学術論文は非常に多く、内容は中ア関係の各分野と各レベルに及んでいる。しかしこの分野の学術専門書は少なく、主に、張鉄生『中ア往来史の初歩的研究（中非交通史初探）』（三聯出版社、1963年）、艾周昌・沐涛『中ア関係史（中非関係史）』（1996年）、沈福偉『中国とアフリカ—中ア関係二千年（中国与非洲—中非関係二千年）』（1990年）、李安山編『アフリカ華僑、華人史（非洲華僑華人史）』（中国華僑出版社、2000年）、呉兆契編『中国とアフリカ：経済協力の理論と実践（中国与非洲：経済合作的理論と実践）』（経済科学出版社、1993年）、陳公元編『21世紀中ア関係発展戦略報告（21世紀中非関係発展戦略報告）』（中国非洲問題研究会、2000年）、楊立華編『中ア経済貿易協力白書—今後5年間の発展計画（中非経貿合作白皮書—未来五年発展規画）』（中国商務部西アジア・アフリカ司+中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所、2003年）、李智彪編『アフリカ経済圏と中国企業（非洲経済圏与中国企業）』（北京出版社、2001年）、北京大学アフリカ研究センター編『中国とアフリカ（中国与非洲）』（2000年）、羅建波『アフリカの一体化と中ア関係（非洲一体化与中非関係）』（2006年）などである。

6. 国別研究分野の代表作

国別研究は中国のアフリカ研究のなかで、スタートが比較的早く、実際、中国のアフリカ研究はまさに国別研究から始まったのである。中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所はもともと1960年代に『非洲列国志（アフリカ列国誌）』叢書を編纂、出版する計画であった。1965年までに7冊の列国志をすでに編纂、出版していたが⁹、その後「文化大革命」のために、編纂、出版作業が中断された。1994年に、中国社会科学院科研局が『列国志』叢書（約200巻、世界のすべての国と重要な国際機関を含む）を重大プロジェクトとして立案し、1999年に正式にスタートした。中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が編集を担当する『列国志』叢書のアフリカ部分（53カ国に及ぶ）は、現在すでに20数巻が出版され、各巻の文字数は18万～40万字に及び、2008年にはすべてが出揃う予定である。

セットで出版される『列国志』叢書のほか、アフリカの国別研究分野の著作は非常に多く、そのなかには、南アフリカ、ナイジェリアなどの国に重点を置いた、葛佶ほか『南部アフリカ

⁹ 宗実『アラブ連合共和国（アラ伯聯合共和国）』（世界知識出版社、1964年）、朱牧流『チェニジア（突尼斯）』（世界知識出版社、1965年）、袁輝『コンゴ共和国、ガボン（剛果（布）、加蓬）』（世界知識出版社、1964年）、袁輝『ソマリア共和国、附：フランス領ソマリア（索馬里附法属索馬里）』（世界知識出版社、1965年）、宗実『スーダン（蘇丹）』（世界知識出版社、1965年）、袁輝『チャド、中央アフリカ（乍得、中非）』（世界知識出版社、1965年）、袁輝『ガーナ（加納）』（世界知識出版社、1965年）。

動乱の根源（南部非洲動乱的根源）』（世界知識出版社、1989年）、葛佶『南アフリカ：豊饒かつ多難の地（南非：富饒而多難的土地）』（世界知識出版社、1994年）、楊立華ほか『南アフリカの政治経済の発展（南非的政治経済発展）』（中国社会科学出版社、1994年）、夏吉生ほか『南アフリカの人種関係の検討と分析（南非種族関係探析）』（華東師範大学出版社、1996年）、艾周昌ほか『南アフリカ近代化の研究（南非現代化研究）』（華東師範大学出版社、2000年）、吳丹編『南アフリカの経済と市場（南非经济与市场）』（中国商務出版社、2005年）、劉鴻武『ナイジェリアの国家政治発展史の要（尼日利亚国家政治発展史綱）』（雲南大学出版社、1999年）、陳仲丹『ガーナ：近代化模索の基礎（加納：尋找現代化的根基）』（四川人民出版社、2000年）などがあるが、紙幅に限りがあるため、ここでは詳述しない。

7. 総合研究分野の代表作

この分野の著述はアフリカ大陸全体のさまざまな面に及ぶ。たとえば、アフリカ手帳編集委員会編『アフリカ手帳（非洲手帳）』（世界知識出版社、1962年）、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所編『アフリカの概況（非洲概況）』（世界知識出版社、1981年）、西アジア・アフリカ研究所編の論文集『21世紀に向かうアフリカ（面向21世紀的非洲）』（中国社会科学院西アジア・アフリカ所印刷、1999年）、李保平・馬銳敏編『アフリカ：改革と発展（非洲：变革与発展）』（世界知識出版社、2002年）、陸庭恩『アフリカ問題論文集（非洲問題論集）』（世界知識出版社、2005年）などである。

この分野の最も大きな成果は、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所の前所長である葛佶が責任編集した『簡明アフリカ百科全書：サハラ以南（簡明非洲百科全書：撒哈拉以南）』（中国社会科学出版社、2000年）である。これは、サハラ以南のアフリカ各国の歴史や現状、将来の発展について、各学問分野から、全面的、系統的に述べた、中国で最初の重要な社会科学の著作である。大型の事典だが、学術的にも、政策的にも、知識的にも、読み応えの面でも、すぐれた作品である。さらに社会科学文献出版社が出した『国際情勢白書—中東・アフリカ発展報告（国際形勢黄皮書—中東非洲発展報告）』（中東アフリカ年度情勢と特別テーマ研究報告）があり、この本は中国社会科学院『国際情勢白書（国際形勢黄皮書）』シリーズの1つで、毎年1冊出版され、西アジア・アフリカ研究所が編纂を担当し、1997年から2006年まですでに10冊続いて出版されている。

第4節 アフリカ研究の主要な学術刊行物

アフリカ研究の学術刊行物は、内部資料から公開出版へ、翻訳文の転載中心から、学術論文の刊行中心へという変化を経てきており、ここからも中国のアフリカ研究の発展過程を見るこ

とができる。次に挙げたものは各時期の主要な刊行物である。

1. 『アジア・アフリカ訳文叢書（亜非訳叢）』：1959年9月創刊。月刊で、毎号8万字、内部資料。主に世界各国のアジア、アフリカに関する文章を訳し、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所の前身であるアジア・アフリカ研究所が出版を担当し、1966年「文化大革命」が始まると廃刊となった。
2. 『アジア・アフリカ資料（亜非資料）』：1963年7月創刊。隔月刊、内部資料で、毎号約5万字。主に翻訳・編集した文章や時事評論の文章を掲載し、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所の前身であるアジア・アフリカ研究所が出版を担当したが、1966年「文化大革命」が始まると廃刊となった。
3. 『西アジア・アフリカ事情（西亜非洲情況）』：1964年創刊。月刊、内部資料で、毎号約6万字。翻訳または編集・翻訳した文章を掲載したが、中国の学者が執筆した文章を主としていた。1966年「文化大革命」が始まると廃刊となった。
4. 『アフリカ動態（非洲動態）』：中国共産党中央対外連絡部が発行、1973年創刊。1978年7月からは中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が発行した。不定期の内部刊行物で、1980年末で廃刊となるまでに計197号を出した。
5. 『西亜非洲資料（西アジア・アフリカ資料）』：中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が発行を担当し、1978年に創刊。不定期の内部刊行物で、毎号約8万字。2000年末に廃刊となるまでに計159号を出した。創刊初期は資料や調査研究の掲載を主としていたが、1986年以降は系統的な資料と公開に適した学術論文を主とするようになった。
6. 『西アジア・アフリカ（西亜非洲）』：中国のアフリカ問題研究における最も重要な学術定期刊行物で、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が発行。1980年の創刊時は隔月刊であったが、2006年7月から月刊に変わり、毎号約15万字。学術論文の掲載を主とし、「本刊專訪」、「熱点透視」、「亜非論壇」、「商務指南」、「人物志」、「外論選登」「学術動態」などの欄がある。
7. 『西アジア・アフリカ調査研究（西亜非洲調研）』：中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が発行を担当し、1992年に創刊した、不定期の内部刊行物である。主に公開に適さない内部研究報告を掲載し、計101号を出し、2001年に廃刊。

このほか、国務院発展研究センターのアジア・アフリカ研究所が発行する『アジア・アフリカ縦横（亜非縦横）』、中国社会科学院世界政治・経済研究所、世界歴史研究所、民族研究所、政治学研究所が発行する『世界経済研究（世界経済研究）』『世界経済と政治（世界経済と政治）』、『世界経済・政治フォーラム（世界経済と政治論壇）』、『世界の歴史（世界歴史）』、『世界の民族（世界民族）』、『政治学研究（政治学研究）』、国際問題研究所が発行する『国際問題研究（国際問題研究）』、現代国際関係研究院が発行する『現代国際関係（現代国際関係）』、商務部国際貿易経済合作研究院が発行する『国際経済協力（国際経済合作）』、『国際貿易問題（国際貿易問題）』などの刊行物、および地方の社会科学院や高等教育機関が発行する刊行物にもアフリカ研究関連の学術論文が掲載されている。

第5節 アフリカ研究が直面する問題

中国のアフリカ研究が直面する問題には長期にわたって存在してきたものもあれば、ここ数年の間に現れたものもある。そのなかで重要なものを選んで述べると、以下のいくつかの点がある。

1. 研究力の著しい不足

これは長期にわたって直面している問題だといえる。中国の国際問題研究の全体的な状況からみると、率直に言って、アフリカ研究は周辺的な学問分野に属する。中国で米国、ヨーロッパ、日本などの国際問題研究分野に携わる人々に比べ、アフリカ研究は層も薄く、力不足である。私が所属する中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所は、最も早くからアフリカ研究に携わっている専門の研究機関であり、現在中国で最大のアフリカ研究機関であるが、現在でもアフリカ研究に従事しているのは 20 数人にすぎず、この学問分野の発展のニーズを満たすことは到底できない。その他の学術機関では普通 2~3 人がアフリカ研究に従事しているだけである。概算統計によると、現在中国でアフリカ問題の研究を専門に行っている研究者は百人足らずである（これでも大目の見積もりである）。もちろん、党、政府、軍の系統および大学でアフリカ問題の研究を兼務している人を加えれば 300 人余りとなる。ただ、青壮年の研究者がとくに不足しており、中国のアフリカ研究者に人材不足が生じるのを避けるため、ここ数年は、人材育成に力を入れているが¹⁰、状況は依然として楽観を許さない。中国社会科学院の大学院

¹⁰ 私の所属する西アジア・アフリカ研究所はすでに人材育成の面で次のような措置をとっている。（1）若い研究者が在職のまま博士課程を受験することを奨励する。（2）若手研究者を協力プロジェクトに受け入れ、早期に中堅研究者を養成する。（3）青壮年の研究者が研究対象の地域や国に行き、現地で視察、研究ができるように機会をつくり、条件をつくる。（4）博士課

を例にとると、ここ数年アフリカ専攻に出願する大学院生の数は増加しているが、さまざまな理由で、学業を終えてから実際にアフリカ研究に従事する人は非常に少なく、ほとんどの人は他の職業に就いている。私の知るところでは、大学の状況もおおむね同様である。

2. 学問分野によるアンバランス

アフリカ研究は多くの学問分野にかかわっているうえ、アフリカ大陸には 53 の国があるため、限られた研究力では何か一つに集中すれば、他がおろそかになる、という結果を免れない。学問分野による研究力の分布がアンバランスなために、各学問分野と各領域の研究レベルがまちまちであるという結果を招いている。アフリカの政治、歴史問題についての研究のように、すでにかかなりのレベルに達している分野もあれば、依然として非常に手薄な分野もある。たとえば、アフリカの人類学に関する研究は現在中国ではほとんど手付かずである。

3. 基礎研究強化の必要性

一部の研究機関を除けば、多くの研究機関が学問分野の発展についての明確かつ具体的な中・長期的計画を欠いている。また計画を立てたとしても、さまざまな理由で実行することができない。そのうえ、ここ数年、政府と社会のニーズ増大にともない、短期的に任される仕事や委託課題がますます多くなっており、多くの基礎研究課題の先送りが深刻化している。一方、基礎研究が衰退すれば、現実問題の研究力が弱体化する。

第6節 西アジア・アフリカ研究所が現在研究している課題

アフリカ研究に携わる最大の専門学術研究機関である中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所が担っているアフリカ関連の研究課題は、計画内の課題と、政府（中央および政府の各機能部門）や企業、金融機関などから任される短期的な委託課題の二つに大別することができる。中国社会科学院が党中央および国務院のシンクタンクとして明確に位置づけられるにつれ、また中国の各対アフリカ協力主体のニーズが高まるにつれ、計画外の課題が増えている。現在私が所属する研究所の学者が担当している計画内課題には主に以下の数種類がある。

1. 「国家社会科学基金」プロジェクト

——「政治改革と社会動乱の防止—南アフリカについての体験的研究」（楊立華研究員担当）

——「21世紀初めのアフリカの発展と国際協力」（張永蓬副研究員）

程の指導教官が研究者としての資質のある大学院生を受け入れるよう促すなどである。

2. 中国社会科学院重大プロジェクト

- 「西アジア・アフリカの重点国家の追跡研究」（楊立華研究員担当）
- 「西アジア・アフリカの資源、市場と中国の経済発展」（李智彪研究員担当）
- 「現代アフリカ政治における民族と宗教の問題」（張宏明研究員担当）

3. 中国社会科学院重点プロジェクト

- 「大国の対アフリカ戦略についての比較研究と中国への啓示」（賀文萍研究員担当）
- 「国際経済環境とアフリカの発展」（姚桂梅副研究員担当）
- 「グローバル化のもとでのアフリカの国家間関係—現実と未来」（張永蓬副研究員担当）
- 「アフリカ諸国の貧困撲滅活動」（安春英副研究員担当）

4. 西アジア・アフリカ研究所重点課題

- 「近代アフリカ思想の経緯」（張宏明研究員担当）
- 「現代アフリカの政治思潮—アフリカ復興の理論と実践」（唐大盾が編集と審査を担当）
- 「アフリカの資本市場」（李智彪研究員担当）

<主要参考文献>

中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所『所史（研究所史）』編纂グループ『西アジア・アフリカ研究所の40年：1961-2001（西亜非洲研究所40年：1961-2001）』、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所印刷、2006年。

馬恵平編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1949-1981年（非洲問題研究中文文献目録：1949-1981年）』、中国アフリカ歴史学会、北京図書館印刷、1982年。

張毓熙編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1982-1989年（非洲問題研究中文文献目録：1982-1989年）』、北京大学アジア・アフリカ研究所、中国アフリカ歴史学会、中国アフリカ問題研究会印刷、1990年。

張毓熙編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1990-1996年（非洲問題研究中文文献目録：1990-1996年）』、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所、北京大学アジア・アフリカ研究所、中国アフリカ史学会印刷、1997年。

成紅・趙萃編『アフリカ問題研究中国語文献目録：1997-2005年（非洲問題研究中文文献目録：1997-2005年）』、中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所、中国アフリカ史学会、北京大学アフリカ研究センター印刷、2006年。

周慕紅編『中国・アフリカ関係研究中国語文献索引：1949-1998年（中非関係問題研究中文文

献索引：1949-1998年』、北京大学アフリカ研究センター編『中国とアフリカ（中国与非洲）』、北京大学出版社、2000年、337-349ページ。

中国社会科学院西アジア・アフリカ研究所編集部編『苦難の道 大きな成果—研究所設立30周年研究成果目録索引：1961-1991（艱辛的歷程 豊碩的成果—建所三十周年科研成果目録索引：1961-1991）』、西アジア・アフリカ研究所、1991年。

北京大学アジア・アフリカ所編集部編『アジア・アフリカ研究所研究成果分類目録索引（亜非研究所科研成果分類目録索引）』、北京大学アジア・アフリカ所印刷、1994年。

中国社会科学院西アジア・アフリカ所編『西アジア・アフリカ（西亜非洲）』月刊、1980年～2007年の各巻。

本文中の「中国の非洲研究の主な研究成果」のなかに挙げた関連著作については、ここでは1つ1つ取り上げない。